

## 切手展出品予定の年賀切手コレクションより

永吉 秀夫

だいぶ昔に、額面2円・5円時期の年賀切手を整理した作品をJAPEXに出品したことがあります。同じ範囲で(できれば7円期も含めて)再出品することを考えています。今回は各年を原則4リーフとして、スッキリまとめるつもりです。次ページに、1963年の4リーフをご覧に入れます。

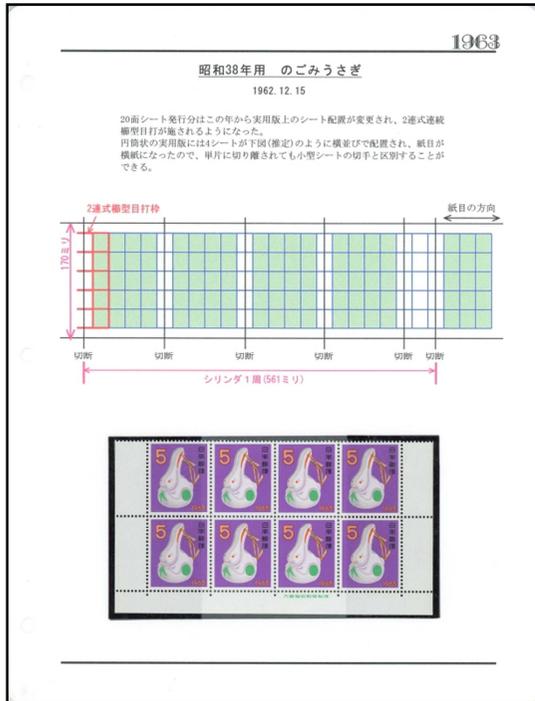
年賀切手に限りませんが、日本切手の製造方法については公開されていないことが多く、コレクションを展開する上でもどかしさを感じることがあります。今回の作品には、わずかな文献と出来上がった製品としての切手の姿にもとづいた推定を、取り入れてみました。上段2リーフには、1963年以降の普通シートと小型シートの実用版構成図(推定)を組み込んであります。特殊な使用例をたくさん見せることよりも、普通の切手がどのように製造されたという考察を優先させました。

戦後1949年に再開された年賀切手は、翌1950年以降しばらくの間、年賀状に使うための切手ではありませんでした。お年玉つき年賀葉書の賞品としての小型シートを発行するためには、一般のシート切手も発行しておかなければならないという理屈で発行されたものです。1953年までは年が明けてからの発行だったこと、1953～66年の間は、年賀葉書が4円なのに年賀切手の額面は5円だったことから納得できることでしょう。

誌面に余裕があるので、戦後額面2円・5円期の年賀切手について、製造面の基本データを下にまとめておきます。紙目やシート耳紙への目打貫通様式など、日専に書いてない要素も少し含めています。少々マニアックですが、実用面構成(実用版上にどのようにシートが配置されているか)も含めました。この実用面構成は、わずかな文献にもとづく筆者独自の推定結果です。

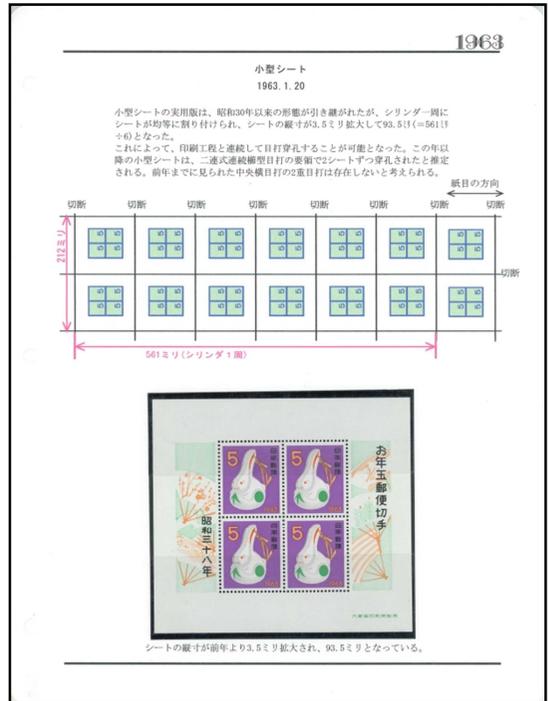
製造面から見て、1952年(普通シートが20面に)、1955年(グラビア多色輪転機の使用開始)、1963年(印刷と目打穿孔を連続工程化)の各年が、節目の年であることが分かります。下表ののち1967年には普通シートが50面に、1972年からはサイズが普通切手サイズに改められるとともに、小型シートが3面構成へと変遷していきます。

年	印刷機	通常シート				小型シート			備考
		シート構成	実用版	紙目	目打	シート構成	実用版	紙目	
1949	板グラビア	50面	2	横	下抜け				サイズ大型
1950	板グラビア	80面	1	縦	右抜け	5面十字型	5×2	横	小型シートは無目打
1951						5面+タブ1	3×4	縦	通常・小型で目打ピッチ異なる
1952	板グラビア	20面	4(2×2)	縦	上抜け	4面	3×4	横	
1953						4面+タブ2		縦	
1954						4面		縦	
1955									
1956									
1957	輪転グラビア	20面	4(2×2)	縦	上抜け	4面	2×6	縦	
1958									スクリーンバラエティ
1959									スクリーンバラエティ
1960	輪転グラビア	20面	4(2×2)	縦	上抜け・ 上下抜け	4面	2×6	縦	スクリーンバラエティ
1961									
1962									
1963	輪転グラビア	20面	4(4×1)	横	左右抜け (連続櫛型)	4面	2×6	縦	変則目打、目打向きバラエティ
1964									
1965									
1966									



1リーフ目：20面シートとその製造方法解説

銘つき8Bを貼っただけですが、模式図によって紙目と連続郵便目打穿孔の関連がわかるようになりました。



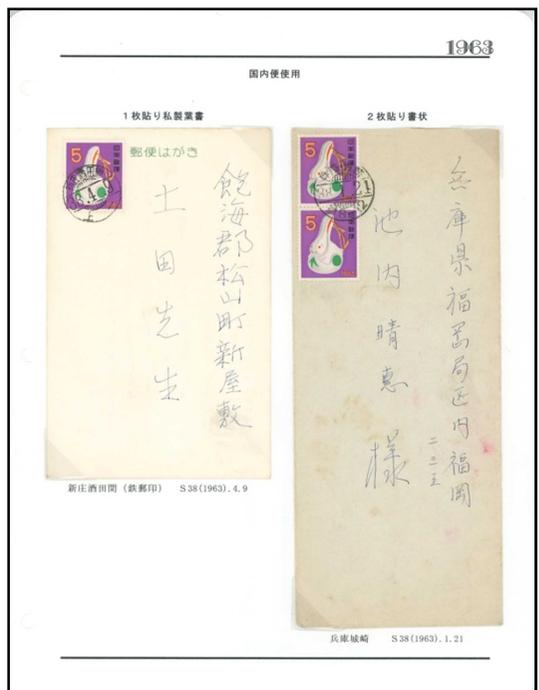
2リーフ目：小型シートとその製造方法解説

シート縦寸を拡大して93.5ミリとすることにより、連続穿孔可能となったことがわかるように図解しました。



3リーフ目：使用済切手を紙目で分類

20面シートと小型シートとで紙目が異なり、切り取り単片でも両者を分類できるようになりました。



4リーフ目：代表的使用例2点

ごく普通の使用形態ですが、葉書の方は鉄郵印。封筒上では紙目がわからないので、分類できません。